庭園 協会ニュース 第83号

一般社団法人 日本庭園協会
東京都新宿区西早稲田 1-6-3 フェリオ西早稲田 301
〒169-0051　TEL:03-3204-0595（FAX 兼用）
E-mail : gsj20@m7.dion.ne.jp　URL : http://nitteikyou.org/
編集者：広報委員長・柴田 正文
　　委員・小沼 康子、加藤 精一、内田 均
題　字：故・上原 敬二
発行日：平成 28 年 1 月 31 日

伝統庭園技塾会場の大義山覚照寺前にて

東日本大震災復興記念庭園築造と伝統庭園技塾

菊地　正樹

東日本大震災で、日本庭園協会東北地域の会員は、それぞれが多くの被害を受けながらも、「今、我々ができることは何か」を真剣に考えました。忙しい中にも話し合いは続きインフラの整備や物資など実質的な支援が落ち着きつつあった3年前、「作庭という表現方法で、被害者の気持ちの復興と供養のために助力しよう。」ということになったのです。

決まった場所は、宮床伊達家の御廟を持つ大義山覚照寺です。宮床伊達家は伊達正宗の直系で、本家である仙台伊達家の当主も輩出している家柄です。派手好きの「伊達男」として知られる伊達家ではありますが、宮床伊達家の御廟はけして華美ではなく、質素で落ち着いた趣があります。

この落ち着いた雰囲気を壊すことなく、激励と鎮魂の意味を込めた庭園を築くことは試行錯誤の連続でした。

しかし、この築造は、我々、造園に携わる者にとって、復興のみならず、伝統の継承という、違う側面からの効果もありました。毎年継続的に、少しずつ完成に近づく庭の築造に参加し、各々が技術を教え合い、確かめ合いすることで、伝統的な技術の継承とその良さを広く知らしめるための「伝統庭園技塾」としての使命を果たすことができたのです。

完成の予定は2年後ですが、今でも十分見応えのある庭園となっています。もし、ふとあの日を思い出して、心乱れたときは、ぜひ大義山覚照寺の庭園を訪れてみてください。そして自然と溶け込むような深い静けさに身と心を預けてみてください。私たちの復興と鎮魂の祈りを込めた庭園が、きっと心を落ち着けてくれることでしょう。

最後にこの庭園築造に着手・継続するにあたり、多くの皆様に励ましとご協力をいただきましたこと、心より感謝申し上げ、筆を置きたいと思います。

（評議員　宮城県支部長）

新年のご挨拶

金子　直作

新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

昨年は3月に北陸新幹線が開通し、今年3月には、北海道新幹線が開通する予定です。全国各地への移動も便利になり、各地との交流も益々盛んになると思います。現在、日本庭園協会には18の支部がありますが、昨年も各支部の方々には、シンポジウム、見学会、研修会等様々な企画、活動を活発に行っていただいています。今年も引き続き活動くださいますようお願いいたします。

当協会は今年98周年を迎えます。100周年まで、いよいよ秒読みとなってまいりました。一昨年発行の「庭園」復刊10号に大正7年からの会の歩みを載せていただきましたが、それらをあらためて見てみますと、庭園の歴史と共に、様々な方々にご尽力を戴いてきた事が伺えます。現在、高橋康夫常務理事を中心に「百周年記念事業準備委員会」を立ち上げ100周年に向けての事業計画を検討していただいています。

また、この事業の一部でもある「東日本大震災復興記念庭園」の築庭が4年目となります。昨年9月は台風17号などの影響で3日間にわたる豪雨があり、現場も被害を受け、伝統庭園技塾の開催が危ぶまれましたが、宮城県支部の方々のご尽力で、10月に無事開催することができ、海外からの6名の参加も含め、多くの会員に参加をしていただきました。今年も引き続き開催する予定でございます。

復興記念庭園石橋まわり

その他にも、継続事業となっております「庭園技術連続基礎講座」、「機関紙の発行」、「日本庭園協会賞」、「国際活動による交流」や「鑑賞会の講演会・見学会」等の本部活動と各支部の活動を円滑に連携した事業を進めていきたいと存じます。

（会長）

平成27年度　伝統庭園技塾
東日本大震災復興記念庭園築庭

平成27年10月11日～15日
宮城県大和町　覚照寺

参加者の熱い心意気に感謝

熊谷　裕典

東日本沿岸に甚大な被害をもたらした大震災と大津波の発生から早くも五年が過ぎようとしています。震災被害者の供養と被災地の復興を祈念して始まったこの伝統庭園技塾も、今回で3回目を迎えました。

この宮城県で行われている伝統庭園技塾のこれまでを振り返ってみましょう。

第1回では、開催地覚照寺の歴代住職の墓石等が並ぶ区域において主に園路整備が行われました。第2回では、この庭園の水源となる貯水池の護岸補強と、その水が流れ落ちる滝石組、またその周辺の土留石組が行われました。そして第3回となる今回は、親水鑑賞ゾーンと称した池を中心とした区域の整備として、滝石組以降の流れから池周辺の石組、植栽さらには土橋の製作も行われました。

参加者も回を重ねるごとに増加しています。さらに今回は、はるばる米国から男女6名の方々が参加しました。皆さん米国各地にある日本庭園の管理等に実際携わっている私たちと同じ庭師です。言葉の壁は大丈夫か?などの事務側の心配をよそに、参加者本人たちは身振り手振り、そして最新鋭機器の「翻訳アプリ」によって、しっかりコミュニケーションを取っていて、受入れ側としては、ひと安心することができました。

また、国内の参加者の中には、第1回から参加している方も多く（実はほとんど?）、お互いに2度目、3度目の再会を喜びながら、そして阿吽の呼吸で作業を進めていく様を垣間見て、今までの「伝統庭園技塾」とは異なる空気が流れ始めたことに気付かされました。

下の池から滝流れ方向を望む

先日、自身の仕事で大津波によって県内でも特に大きな被害を受けた亘理郡山元町を訪れました。あれから4年が過ぎようとしているのに、津波によって陸に残されたあの独特の海水の泥の匂いがまだ強く残っていることに驚かされました。大震災の傷跡はまだまだ残っているのだなと再確認させられました。同じ宮城県民なのに…。

全国各地、いや世界の庭師達が、被災地ここ宮城県に集結し、「東日本大震災復興庭園」を力合わせてつくりあげる。これって、すごいね！すごい事だよ！

復興庭園を我らの手で完成させようと集まってくる仲間に心の底から感謝し、次回第4回伝統庭園技塾を開催する準備を、また始めようとしている所です。

（正会員　宮城県支部事務局）

東日本大震災復興記念庭園築庭を省みて

小林　竑一

私達〝TEAM NORTH AMERICA 北亜米利加組〟にとり、今回の築庭への5日間の参加は本当に短く感じられたものでした。参加者達にとり、一生忘れがたい記憶となり、また多くの人達にとっては、それ以上のものになりました。我々北米からの参加者は被災者への祈りと共に、復興に向けてどのような支援、貢献ができるかと模索する時が流れ、その結果として宮城県支部の皆さんの発起された作庭に今回初めて参加できたのです。私は2011年以来、この企画の様な貢献参加の機会を求めてやっと2014年の北米日本庭園協会のシカゴ大会にて日本庭園協会の賛同の下、北米からの参加者を募る発表ができました。その発表では次のように語りました。「日本庭園の築庭に米国人またカナダ人として参加できる本当に稀な機会への参加を募ります。2011年の東日本大震災被害者への祈りと復興への思いを込めた記念日本庭園造りが宮城県仙台郊外にて5ヶ年計画で進められています」。我々は〝TEAM NORTH AMERICA〟となりました。これも日本庭園に心を寄せる者達ならでは…。参加者の構成は男性4名、女性2名、私を含む70才代から20才代と幅広く、そして日本庭園における経験は3～7年から私の45年以上とまちまちでした。参加者はリーダーとしてシアトル在住の小林竑一、副リーダーとしてカリフォルニア・サンホゼからのドン・チェンバレイン、そしてペンシルバニア州フィラデルフィアからのフランチェスカ・スナイダー、カリフォルニア州サラトガのジェイコブ・ケルナー、マンザナーのジェフ・バートン、そしてサンホゼのビュラ・アビンギラ達でした。

フランチェスカとジェイコブはそれぞれ北米の箱根庭園と松楓荘庭園の庭師です。主催者は2018年に設立100周年を迎える日本庭園協会。実施は菊地正樹氏を支部長とする宮城県支部があたり、毎年日本各地より50数名の庭師や関係者が集まって、和気あいあいと進められてきています。今年2015年はその第3年度にあたり、庭の概要が表れてくる年でもありました。日本庭園築造の技術を学ぶと共に日本の熟練した庭師達の指導の下、仲間と共に働き親交を深める本当に数少ない機会だと思います。またこれは日本庭園を広く世界に向けて発信し国際的な交わりを深めていく場になっていくと思います。私は現在この〝北亜米利加組〟を〝国際組〟へと進展させる考えで英国やデンマークの日本庭園の関係者と連絡を取り始めました。また2016年の1月中旬より北米西海岸のサンディエゴ、ロスアンゼルス、マンザナール、サラトガ、シアトル、そしてバンクーバーを巡り、2016度およびそれ以降の参加者を募るための連続講演会を兵庫県立大学の中瀬勲教授（阪神淡路大震災研究者）の支援を受けて計画を進めています。今回の北米からの参加者の参加動機や感想は様々ですがその一端をここに述べておきます。

フランチェスカ：私は日本庭園

左からドン・チェンバレン氏、小林竑一氏、フランチェスカ・スナイダー氏、ジェイコブ・ケルナー氏、高橋康夫常務理事、ジェフ・バートン氏

については新参者です。フィラデルフィアの松楓荘に常勤で2年半、今、様々な方法で学習中です。松楓荘においては庭園内外で施工法、石組、水景、移植などを学んでおり、時にはそれらを両親の庭に適用しています。今回初めて日本に来ることになり、日本の庭園仲間と共に働き、新しいことを学び、観察できることを楽しみにしています。私の将来にわたって、貴重な経験となることを願っています。

ジェイコブ：私にとり日本庭園に従事することは単なる職業としてではありません。それは情熱です。そのように言えることを誇りに思っています。またいつまでも技を学んでいくことは大切だと信じています。たとえ剪定の様な小さな作業でも、

一緒に作業するフランチェスカ・スナイダー氏

その結果では庭を変えてしまいます。仙台でのこのプログラムは皆様と共に働く機会と同時に学びの場を与えてくれるでしょう。庭は多くの人々に能動的な場を作り出します。そのひとつは〝癒し〟です。私は東北の多くの人々が、庭により癒されていると思います。震災からの被害を乗り越えて能動的に、また役立つ情況を作り出せるのは人々の心であり、私はそれに寄り添いたいと願っています。

ドン：私は1980年代のほとんどを日本で過ごし、その間に日本庭園に興味を持つようになりました。帰国後自宅の周りに日本庭園を作りはじめ、数年かけて自宅と共に改造し現在では隣人や道行く人々に楽しまれています。今回のプログラムを知り私の技を発揮できると共に過去30年間の日本の変化の様子を知りたくて…。また、ただの観光旅行ではなく記念庭園を新しき友人達と築く、願ってもないことです。

ジェフ：2011年の悲惨な震災と津波には世界より同情がよせられてきました。マンザナール国立公園（第二次世界大戦中多くの日本人・日系米国人が強制収容され、そこでは収容中に数多くの日本庭園がつくられました。）の考古学分野の主任

土橋の下地作り

責任者として庭が人々の心を癒してきたという事を理解しています。

今回の2011年の災害から立ちなおる為の記念庭園築庭に参加できる事を誇らしく思っています。また個人的にはこの参加を通じて、よりよく日本と日本人への理解が深められる事を願っています。数多くの日本人庭師達が参加してきているこのプロセスはまさにマンザナールにて行なわれた事です。

我々は今回の参加、旅行の一環として仙台での作業後日本庭園の源流を平泉の毛越寺庭園に見、津波が眼前にせまった気仙沼の煙雲館を訪れました。館主の鮎原文子さんと親しくお話しをさせていただくなかで中村一先生や同窓の尼﨑博正氏の名が出てきてなつかしく思いました。その後、陸前高田においては被災者ボランティアの加与さんに英語で案内していただき、とても感動的な旅となりました。最後に京都にて庭々を鑑賞の後、京都造園懇親会にて特別プログラムを組んでいただき、我々の今回の仙台における築庭への参画の模様や感想をお話ししました。とても良い会でした。

今回の築庭作業及び、それに伴う毎夜の夕食会、検討会そして飲み会などを通じて我々が深く感じ伝えたい事は

・自然は時にはすさまじい猛威をふるいますが、人間はいつでも最後にはそれらを克服します。

・日本は私に様々な経験を与えてくれました。最も私を感動させたのは人々の心、やさしさ、そして力強さでした。

・この旅では様々な忘れ得ない人々に出会いました。また日本庭園についても多くの事を学びそれを子供達に伝えていきたいと思います。

・今回の参加は当初期待していたもの、いやそれ以上の成果でした。参加された人々の技能やその熱意には深く心を動かされました。

・来年度も是非参加できればと考えています。

・この日本庭園づくりそして日本庭園について積極的に世界に向けて発信される事を願い、我々もそれに参加したいと考えています。

（シアトル在住）

小林竑一（こばやし・こういち）

1968年京都大学林学造園を卒業、1年間造園研究室で助手生活後カナダに移住しバンクーバー、トロントでの生活後、1970～72年カリフォルニア大学にて修士取得。その後教職（オハイオ州立大学、ワシントン大学）、民間事務所（建築および造園）、市役所勤めの後、1981年よりシアトルにおいて都市計画・造園設計事務所を開設しアメリカや日本、中国における仕事に携わる。この間ドバイにて5年ほど過ごしている。学生時代の原点は日本庭園で、これまでも、これからもその気持ちは持ち続けて活動していく。

伝統庭園を知る

田村　岳彦

初年度からの参加で、今回3年目となる宮城県の覚照寺で行われた伝統庭園技塾。1年目、2年目での参加で多くの事を学び、様々なものを得る事が出来たこの技塾に今年も『何か』を求めて向かいました。

現場では3年目ともなると皆知っている顔がほとんどで、前年に比べ言葉のやり取りが格段に多くなった様に感じました。その影響か作業の能率が年々良くなっているのが目に見えて分かりました。普段の仕事でもそうですが、共に仕事する人とのコミュニケーションの重要性を再確認することが出来ました。

力を合わせて作り上げる

毎年そうですが講師の方々、また多方面から参加する塾生からは物凄い熱意を感じずにはいられません。朝から夕方まで現場で作業をこなし、夕方から夜中まで庭談議に花を咲かせる。そんな毎日が続きます。面白くない訳がありません。またこの10月の庭園技塾の前には、膨大な下準備が休暇の度に行われているのですが、そこに協力している方々のこの東日本大震災復興庭園に対する熱意、情熱こそがこの庭園技塾に参加する講師の方々や塾生達の意気を上げているに違いありません。

この庭園技塾の講師の方々はあらゆる知識、技術、小技、はたまた昔の職人の諺だったりと、ありとあらゆる事を惜しみなく教えて下さるので一挙手一投足、一言一句見逃せません。そこでは新たに知る事は勿論のこと、自分で知っていたつもりの事でも改めて考えさせられる事が多くあり、今後の自分に大きく影響していくであろうと思います。

そしていつか自分がここで感じた事、得られた事を自分の言葉や形として次の世代に伝える事こそが伝統庭園なのではないでしょうか。

（正会員　宮城県支部）

鑑賞研究部　秋季庭園見学会
「東京の文化財庭園秋の顔をさぐる」

平成27年11月6日　坂本新太郎

午前8時45分定刻にバスは25名の参加者を乗せて新宿駅西口、工学院大学前を最初の見学地新宿御苑に向けて出発した。

●新宿御苑

新宿御苑は信州内藤家の下屋敷であったが、明治維新後政府の農業試験場を経て明治39年に皇室の庭園となり、新宿御苑と称されるようになった。面積58．3ヘクタール、フランス整形式庭園、イギリス風景式庭園そして日本庭園がある。私たちの訪問時は菊花壇展が開催中であり、回遊式の日本庭園各所に素晴らしい青竹を使った上屋が設けられ皇室ゆかりの各種の古典菊が華やかに、しかもかなりの数量で展示されていた。

新宿御苑で開催されていた菊花展

●国際文化会館

次の見学地は麻布鳥居坂の国際文化会館である。江戸期の大名屋敷、明治期の井上馨邸などを経て岩崎小彌太のもと三菱の迎賓施設として建築され、庭園は小川治兵衛の手になった。その後建物は戦災で焼失したが、庭園は残り今日に至っている。

土地は財産税で国有地となったが、松本重治が設立した財団法人国際文化会館に払い下げられた。同財団は世界の質の高い人物との交流を推進し国際的に寄与する文化の創造に資する事業を展開してきている。

●綱町三井倶楽部

綱町三井倶楽部は三井家及び三井グループの迎賓館として設立された。建築及び西洋庭園の設計はジョサイア・コンドル博士であり、敷地の9割を占める約6，000坪の広大な和風の庭の設計は茶人の藪内節庵氏、施工は当協会のメンバーである柴田集花園六代目柴田康雄氏の曽祖父であられる柴田徳次郎氏の手によった。

綱町三井倶楽部で見学の後昼食をいただく

庭園見学ののち西洋庭園に面した当倶楽部のダイニングルームでワインをいただきながら品格の高い正餐ともいえる昼食をいただいた。

●東京大学懐徳館庭園

東京大学構内にある迎賓館の庭園を見学した。元加賀藩上屋敷。明治になり上地。のち改めて前田家に下付された。前田家は日本館、西洋館を建築し、庭は伊藤彦右衛門が作庭した。その後東京大学の拡張希望によって東大構内となる。昭和10年懐徳館と命名。戦時中の空襲により被害を受けたが再建し今日に至っている。

●浅草寺本坊　伝法院庭園

伝法院は浅草寺の本坊であり住職の宿坊である。明治期に国に上地や東京都とのいきさつなどを経て現状に落ち着いた。庭は小堀遠州の作とも伝えられるが確証はないという。心字池を囲んで周遊できる庭である。本坊からの眺めは素晴らしく、ここが東京のど真ん中の浅草であることを忘れさせる庭である。

１０００万都市の中にあってきわめて貴重な庭園であり、非常に貴重な国民の財産であると実感させられる空間である。

（正会員）

鳥取県支部・本部共催で鳥取県内を巡る

小野　登身

見学に先立って鳥取県支部長の石亀靖氏より鳥取県の庭園について紹介があり、龍居竹之介名誉会長からは「日本の庭園タテからヨコから」と題して講義がありました。時の流れの中で、その時代の人々の思いで作庭が行われた。そして人の要望に応えるために変貌を繰り返しながら、現在に在る。他方ヨコの見方として、庭園意匠の種類で言えば、築山・平庭・茶庭の三様で捉えることができる。結論として、これから私たちが庭への取り組む心構えとしては、生活空間である建築との協調に気を配ることを課題としたいとの提言をされたと思います。

見学地としては湯梨浜町と中国河北省との友好のシンボルとして建設された燕趙園、江戸中期の大庄屋尾崎家の松甫園（国指定名勝・非公開）、今講座でお世話になった石亀氏のデザインがコンペで採用、施工もされた倉吉新斎場の庭園を巡り、翌日は紅葉真っ盛りの中国山脈を山道ドライブで佐治町へ。旧佐治町役場中庭では銘石佐治石で中根金作氏が作庭された〝黎明の庭〟にて、表情豊かな苔を生した川石に暫し感動させられました。智頭町の豪商石谷家住宅では贅を尽くした建築に圧倒されました。昼食を兼ねて立ち寄った有隣荘では美味しい料理と池庭を楽しみました。観音院では傾斜地形を生かしての池泉観賞式庭園を直接庭園に携わっておられる田中宏夫氏の解説で拝見、興禅寺では江戸時代初期の蓬莱山水・池泉観賞式庭園を鑑賞、鳥取城址に建てられたフレンチルネサンス様式の明治時代を代表する西洋館の仁風閣、最後に重森完途氏作庭の鳥取県庁の中庭を見学。

江戸中期の大庄屋だった尾崎氏庭園

今回見学した名勝の庭にしても現代の庭でも維持の大切さは共通の課題でしょう。そこには技術・技能が欠かせません。幸いそれを引き継いでいく気風が日本庭園協会にはあると思います。伝統庭園技塾などの講習会等で、仲間が広がり次代を担う人たちが増えることを楽しみにしています。島根県からの参加者が県支部を立ち上げますとの決意表明を聞き心強い限りです。

最後に石亀支部長はじめ、講座に携わって頂いた皆様に感謝申し上げます。

（評議員　広島県支部会員）

鳥取講座からはじまる

岡　和生

この度、日本庭園協会の鳥取講座があるという事で、いつもお世話になっている松江の安達誠氏の誘いで特別参加させていただきました。特に龍居竹之介名誉会長の講義が聴けるというので楽しみにしていました。会場の湯梨浜中央公民館で私が受付をしていた時、はじめてお会いすることができましたが緊張と同時にとても嬉しかったです。そして、「日本の庭園タテからヨコから」という講義がありました。日本庭園を見るとき一番大事なのは、自身の今の眼で見据えることである。また、時代（タテ）の流れのなかで茶の湯の庭の出現で日本の庭をここで区切ることができる。課題として生活空間である建築との協調が大事である。…などとても貴重なお話で、21世紀の庭さらに22世紀の庭の事も、龍居名誉会長はすでに知っておられるのではと思うような講義でした。続いて中国庭園燕趙園、国指定名勝尾崎氏庭園、鳥取県支部長石亀靖氏作庭の倉吉新斎場を観ました。ここを作庭されるにあたり、この地に伝わる天女伝説をモチーフにされた事がとても印象に残りました。

佐治石を使った中根金作作庭の黎明の庭

2日目はまず、佐治石を産する佐治村で中根金作氏作庭の黎明の庭、石谷家住宅、有隣荘庭園で昼食をとり、国指定名勝観音院庭園に行きました。ここは最近手を入れ修復されたそうですが、大きく池を配し鶴亀の石組、背景のやわらかいラインの斜面で、いい感じでした。足早に興禅寺庭園、仁風閣、最後は重森完途作庭鳥取県庁庭園でした。鳥取は隣県ですのでよく来ますがなかなか観られない所も観られてとても良かったです。後日、日本庭園協会の歴史や活動、各支部の活動を知りましたが、すごいと思いました。島根県にもやる気のある20代30代はいますが高い意識で庭を考えている人と出会ったり、語ったり作ったりする機会は実際ほとんどありません。懇親会では、島根県支部をとの話しがでましたが、このような事が島根でもどんどん出来れば素晴らしいことだと思います。この鳥取講座を機会に何かはじまるといいですね。

最後になりましたが、最初の準備企画から最後まで何から何までお世話していただきました鳥取県支部長石亀靖様、鳥取県支部の皆様感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

（非会員　島根県在住）

鳥取講座ようこそようこそ

石亀　靖

平成27年11月7日に、ようけの人が鳥取に来てごしなってすんませなんだ。たらんことがあっただらあけど、こらえてごしないな。

最初、龍居先生に講義をしてもらい、庭の歴史をタテ軸として意匠の様式をヨコ軸としてとらえて絵図を用いて解説しなった。そして、なぜ全国に同じような庭園ができたかも解き明かしてごしなった。また、今後の作庭家の課題として、「庭は建築の単なる付属物ではないし建築も庭の一部ではない。両者が融合して生活空間を作り上げるべきだ。建築家と渡り合える造園家であって欲し

尾崎氏住宅前でご当主も加わり記念写真

借景と築山の稜線が美しい観音院庭園

い。」と話してごしなりました。そのあと、中国庭園・尾崎邸（非公開）・倉吉新斎場（石亀作庭）と観てもらった。

懇親会での先生は、島根県支部が発足しそうなことをことのほか喜ばれて、今にも涙が溢れんばかりだったなあ。ご自身がまだ若かりし頃、先輩たちが頑なに東京本部だけの活動がしっかりしていれば良しとされていたなか、地方に広がりを持ってこその庭園協会であるべきとの主張をなさり、初めて埼玉に支部ができた時のことを述懐されてたのでよほど嬉しかったんだなあ（これには、後日談があるような。）。

２日目は峠の紅葉がみごとで、雨で濡れた黎明の庭の佐治石もええ感じでわたしたちを迎えてくれたなあ。石谷家住宅では、こがな山ん中にこげな立派なものがあっただかいなあとビックリしとんなった。つい最近、紀子さま・佳子さまも召し上がられた有隣荘で昼食をとってもらって、観音院・興禅寺・仁風閣とてえてってあげたけど、時間がなあてすまんことでした。若いもんはお城の石垣の天球丸でたわむれとったけどあきたらず、次の日は日本一危険な国宝の三徳山の投入堂に上がんなったような。今回は来れんかった人も、どうぞ鳥取に来てみなんさいな。最後になったけど、皆さんにようこそようこそ。

本当に、ありがとうございました。

（評議員　鳥取県支部長）

番外で何人かの有志が挑んだ日本一危険な参拝で有名な三徳山投入堂

富士山信仰と近代日本の森づくり（抜粋）

国際日本文化研究センター共同研究員　岡本　貴久子

本多静六の森づくり―祈りと実践

山岳信仰とは、そもそも一般衆生とともにある宗教といわれる。それは「実修実証」即ち「祈り」と「実践」をもって五穀豊穣、子孫繁栄、国家安穏を祈願する信仰であり、つまりは「自然のいのち」を敬い、それを育むための信仰と考えられる。本多の築いた近代造林学もまた、山や自然に対する信仰心に支えられたものであることが、彼の著述や事績から確認できる。

例えば本多は『社寺風致林論』において、社殿のある通常の社寺林とは趣を異にする、神の憑代としての森林を次のように論じている。「神社を有せず只僅に鳥居又は拝殿のみを有し、主として山林を拝するものなれば、其山林は神社と同一の資格を有し、神社と同様に荘厳神聖ならざるべからず故に、神体林にありては其森林を神聖に保つことが第一儀（ママ）とせざるべからず、即ち現在せる森林は一切禁伐になし、如何なる古木、枯木、ツタ、カツラの類迄も一切之を保存すべき」［本多１９１２］。

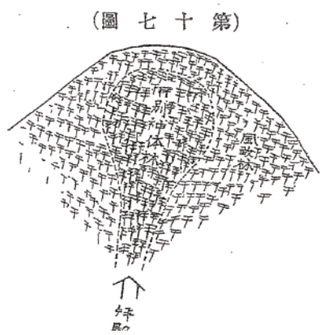
本多は、山そのものを神格とみなす「拝む山」、つまり神奈備山としての奈良県大神神社の三輪山や埼玉県金鑽（かなさな）神社の御室山を例に、その神聖さを保つために一切手をつけるべきではないと主張する。だが、「多少人工または野火の為めに不自然なる不良の状態を呈するものなれば、大抵之を改良するの必要ありとす」［本多　同］として、山の尊厳を侵さない程度に最小限の保護手入を施すことは、山を守るためには必要な措置であるとした。富士山という山は、謂わば「神人交歓」の場であり、宗教性と娯楽性が共存する山といえようが、これについては次の言説が参考になる。

「如何なる場合にも一時に森林の大部を伐採し、又は植替ふるが如きは決してなすべきことにあらず、蓋し一時たりとも神体林を失ふは神の居場所を失ふに等しく、大に崇高の念を減ずるものなり。神体林は成る可く人跡を入れざるを欲するにより、必要の場合には其周囲に土堤を築き、又は柵囲をなすべし。（略）

若し又大森林にして其一部には登山道を存するか、若くは人の遊覧場に供せらるゝ如き場合には、其最も重要なる部分林に山頂又は拝殿より礼拝する中心の部分、仮令ば（第17図）の如く人跡不入の森林を設け、之を特別神体林として柵囲をなし、他の部分は普通社寺の風致林の経営法に従うべし」［本多　同］。

参考までに本多の示す「第17図」を転載した。「特別神体林」を中心に風致林がこれを取り囲んでいる。つまり、特別に畏敬の対象になる自然物を一般の自然物と区別した上で、森羅万象を尊ぶという姿勢である。このことは国立公園設置運動の際に説かれた山林の開放についても該当する。

「開放された山林は斯くの如く野外教室ともなり、遊楽地ともなり、



本多静六「社寺風致林論」より神体林の図
（大日本山林会 1912『大日本山林會報』356 号）

静養所ともなり、其利用の途は更に多く見出されるのである。（略）然しながら茲に注意すべきことは、小面積で而も多数民衆が雲集し易い社寺林に於ては、其の開放は不可能な場合が多い。由来社寺林は其本来の性質上、幽邃荘厳神聖を保つべきものであるから濫りに開放は出来ぬ。若し之を開放する場合には十分なる考慮を費し、社寺の荘厳神聖を害さぬ範囲に於て開放すべきである［本多１９２１］。

このように本多には山や自然を崇敬する信仰が身に付いているからこそ、近代生活における山との付き合い方やその守り方を説くことができるのである。つまるところ本多造林学とは、精神性と実用性の両側面に配慮してなされる森づくりということができよう。

「生たる記念碑」を育てる

「百年の長計」という森づくりでは、後世にそのその実りを護るという思想が日本の山々を育ててきたといわれる。それは相互扶助的に、子々孫々と生命（いのち）の繁栄を願う心を根拠とするものである。地域の人々に愛着ある老樹名木を「生きたる記念碑」［本多１９１１］として尊重した本多の言葉を借りれば、「其の地方固有の性格を現はし、其の地方の紀念となり、之が保存の価値ある天然物」［本多１９１６］である富士山は、まさに日本の「生きたる記念碑」となった。植栽された樹木について本多は斯くの如く語る。「歳とともに栄えて、花咲き、実を結ばなん。我らは我らの子孫とともに長へに歩まん」［本多１９１３］と。

文化資源学会で発表する著者
（平成 26 年 12 月 6 日 東京大学）

むすびにかえて

戦後の荒れた山野を前に、１９５０（昭和25）年、第１回植樹行事並びに国土緑化大会が甲府市片山恩賜林（テーマ：荒廃地造林）にて開催され、１９５２（昭和27）年には第３回大会が静岡県函南村十国峠（テーマ：入会原野造林）で行われた（愛林日記念植樹としては１９４７年に復活）。１９９６（平成８）年の台風被害から富士山憲章が制定され、自然林の復元を目指して「まなびの森」づくりも営まれてきた［真下１９９９］。富士山が世界遺産として登録されたのは、このように森の繁栄を願う先人たちが、まさに「生き物」としての緑の「いのち」を尊び、人々とともに守り育て続けてきたところにあるといえるのではないだろうか。

御製

「西天城高原の空晴れわたり
ひめしゃらの苗人びとと植う」
（第50回全国植樹祭）

岡本貴久子（おかもと・きくこ）
国際日本文化研究センター共同研究員。東京大学大学院人文社会系研究科、修士課程修了、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了、博士（学術）。
専門は文化資源学、近代日本文化論。主な著書に、"A Cultural History of Planting Memorial Trees in Modern Japan :With a Focus on General Grant in 1879,"『総研大文化科学研究』（２０１３）、共著で、秋道智彌編『日本の環境思想の基層』（岩波書店２０１２）、末木文美士編『比較思想から見た日本仏教』（山喜房佛書林２０１５）ほか。

付記
生き物文化誌学会のＢＩＯ ＳＴＯＲＹ vol. 22（２０１４年12月1日誠文堂新光社発行）に掲載された岡本貴久子氏の論文『富士山信仰と近代日本の森づくり』の一部を「ビオストーリー」編集委員会及び出版社のご厚意により転載させて頂きました。厚く御礼申し上げます。

平成27年度　支部活動報告　埼玉県支部

「泥深庵（なずみあん）」お披露目茶会

平成27年11月8日

埼玉県支部の研修会

野村　光宏

11月8日、埼玉県立いずみ高等学校において、茅葺きの茶室「泥深庵（なずみあん）」お披露目茶会が100名を超す参加者のもと開催されました。

いずみ高校での研修会の集大成である「茶会」は会員の力の結集です。高橋良仁氏（初代支部長）から受け継いだ泥深庵を中心に、三州三和土の水景、球体の石組、野点席、パネル展示の方法など、幾度となく相談し練り上げた成果であります。また、茶事において未熟者の私の発言に対しても、けして後戻りすることなく前向きに、自分の事と考え、向き会っていただきました。

今回、「茶会」を開き感じた事は人と人の結びつきとつながりであったと思います。茶会に出席していただいた方のなかには研修会でお世話になった河西力氏、安諸定男氏、大北望氏、豊蔵均氏の方々がいらっしゃいます。この方々と出会えたのは高橋良仁氏企画の研修会を通じ会員と結びつけてくれたおかげです。その結びつけの役をするのが人であり、ものつくりであり、語り合う場であります。

研修会では技術を学ぶ事も大切ですが、人が集まり共に作業し、共に語る中で啓発され育って行くのではないでしょうか、一人で出来る事は一人ですれば良いのですが、大勢の方が良い事もあります。今回の茶会のように、けっして一人では成し得ない事が、みんなの力が集まると出来てしまう、これこそが支部活動の最大の魅力ではないでしょうか。

茅葺きの茶室を構築するに当たり、「日本茅葺き文化協会」主催の「ワークショップ茅葺き、茅刈り」に参加いたしました。そこでお世話になった吉村徳男氏の話の中に「茅葺き屋根を葺き替えする時、大勢の人々の手でする事を「結い」と呼びます。屋根を葺く事は大切ですが、もっと大切な事は作業を通じての人の結びつきです。地域のつながりを親から子へ、そして孫へつなげて行く事、それが地域を守り生きてゆくという事です」とありました。それを聞き、支部活動は『結い』だと感じました。

（評議員　埼玉県支部長）

100名を超す参加者でした

職人たちの自由で悦楽に満ちた茶会

豊蔵　均

日本庭園協会の数ある支部の中で、最もラディカルな活動を展開してきたのは埼玉県支部でしょう。初代支部長の高橋良仁さん、2代目支部長の厚澤秋成さん、そして現支部長の野村光宏さんをリーダーにラディカルなモノづくりの場であったのが、埼玉県立いずみ高等学校のキャンパスでした。

同校は実業高校。2001年に《スペシャリストに学ぶ》という体験重視型課外授業がスタート。社会の第一線で活躍するプロと高校生のコラボを通しながら学ぶというカリキュラムです。その同校からオファーがあったのが埼玉県支部でした。

一方のプロというより生粋の職人集団であった埼玉県支部では、自由にモノづくりに集中できる場を求めていましたので、渡りに船とばかりお互いの欲求は一致、こうして生まれたのが泥の茶席「泥深庵」＝なずみあん＝です。当初は左官職人の名人、榎本新吉さんや竹工芸職人の小出九六生（つむお）さんをゲストに泥の可能性を探り竹を素材にした自由なモノづくりを探ってきました。

初めの「泥深庵」は木舞の上に泥を塗りたくった構造で屋根まで泥でした。風雨に晒され傷みが激しくなり、野村支部長の代になって生まれ変わったのが、今の茶席です。

2001年から16年、連綿と続けてきたこの活動に関わってきた人の数は、優に千人を超えるでしょう。日常の代価を得る仕事ではない無償の行為は、情熱というエネルギー欠乏の人には努まりません。熱いエネルギーが集約したその結晶が、「泥深庵」なのです。

この茶席と並ぶ一連の修練のフィニッシュを飾る茶会が、昨年の11月8日、同校で開かれました。職人たちはかけ替えのないこの場で惜別の茶を点てたかったようです。その証しのように朝から降り続く雨は、職人たちの身体に纏わり着く「地雨（じあめ）」のようでした。

茶会は自由で悦楽に満ちた創意と工夫の中、滞りなく幕を閉じました。この日の雨の茶会に集った職人は50余人のすべてが青年です。どんな企業にしろ団体にしろ業界にしろ、未来は青年たちの手に懸かっています。青年を育てることは未来を創っていることにつながります。この意味でいえば、埼玉県支部の未来は輝きを放っているようです。

（正会員）

泥深庵の編笠門

「茶会」に参加して

伊藤　哲也

私が日本庭園協会埼玉県支部に入会したのは知人の紹介で、年末に行われている「作品発表会」に出席したのがきっかけでした。そこで見た会員が創った作品の写真はどれもすばらしく、参加者の方々が真剣な眼差しで作品を眺め熱く討論していることに衝撃をうけました。自分が経験してきた造園の世界とは違う世界がここにあると感じ、その場で入会を申し込みました。

その後、いずみ高校での「球体の石積み」は最初から参加しました。自分自身不慣れな石を一つ一つ積み重ねていき、参加した多くの人が積んだ石と重なり「創る」という想いの力がだんだんと形になり、完成時には大きな力となって周りの環境に溶け込んでいくことを自分の目と体で実感したときに「これが埼玉県支部のやっていることだ！」と感動しました。

また、支部活動の後で懇親会があり、先輩方から日頃聞けない話を聞かせていただいたり、同年代や若い世代の人達に疑問をぶつけたり普段味わえない時間を過ごすことができました。最初は会話についていけなかった私も少しずつ話せる様になり、自分の気持ち、自分の思いを持つことの大切さを教えていただきました。

今回、いずみ高校での15年間の活動の締めくくりでもある「茶会」の準備に参加して、多くの人の想いを形にすることができました。当日は雨でしたが、野点では支部会員がお手前を披露し、冷たい雨の中のお茶を立てている姿で一層引き締まった空気になり、15年の歴史の重みを感じました。

茅葺きの泥深庵の前での茶会風景

多くの人の「汗」と「思い」で出来上がった茅葺屋根の「泥深庵」で、いずみ高校茶道部の皆さんにお手前を披露していただいたときは「球体の石積み」の完成時に味わった「このときのためにやって来た」という思いがわいて来て感動しました。まさに「茶会」のテーマでもある「創造からかたち、そして感動へ」でした。

私は、なぜものづくりにこだわるのかという疑問があったのですが、それは「完成時に感じる一瞬の感動を人に与え、自分で感じるため」だと実感しました。

（正会員　埼玉県支部）

河西力氏、大北望氏、豊蔵均氏らの顔も見える

この若者に注目 ②

取材・小沼 康子

香川県支部……仙波 太郎 さん（40）

仙波農園代表　松山市出身

2013年作庭のＳ邸つくばい周り

◎支部長から一言

京都で修業を積み、若くして父親の後を継ぎ、多くの造園人と交流を深める一方、研修会へ積極的に参加し、技術技能の向上に努め、自分なりの庭のスタイルを確立すべく活動をしています。次世代をリードする庭師として今後が期待されます。

香川県副支部長　越智 将人

◎自己アピール

●現代庭園から庭園文化まで

「庭」という言葉にはこだわりはありません。外部空間の必要性を考えて構成しています。現代庭園から先人が作り上げた品格あるすばらしい庭園文化まで、自分なりに勉強して解釈し、必要技術ならば自信をもって取り入れたいと思います。

●心がけていること

施主との対話を大切にしています。話すことにより、空間づくりにおいて重要なこと、大切にすべきことがよくわかります。それらに自分の感覚をプラスして、形先行とならず、精神性の高い庭づくりに努めています。また、その地域ならではの素材を生かすこと、その空間の中で植物が健全に育つ場所や種類の選定に心がけています。植物や石など素材の一つひとつが最大限生きるように、一番良い見えかたをするように試行錯誤しながら、より良い空間となるよう考えています。施主にとって本当に必要であり永遠に大切にしてもらえる空間づくりを心がけ、自分なりの品格のある美的空間を意識し、達成していきたいと思っています。そして何より自分自身の人間性の向上に努めたいと思っています。

●良き指導者

香川県支部には素晴らしい庭師達がおられます。技術技能はもちろんのこと、礼儀からはじまり、造園人とはどうあるべきかを身をもって指導していただき、自分も含め若手は、よく考えよく悩み、日々鍛錬を続けていきたいと思います。

（香川県支部会員　仙波 太郎）

編集委員コラム

木になる葉なし ③

加藤　精一

鎌倉に旧一条恵観（えかん）山荘があります。「一条恵観」慶長10年（1605年）～寛文12年（1672年）は、後陽成天皇の第九皇子で摂政関白を歴任した人物です。兄である後水尾天皇は修学院離宮を、叔父の八条宮智仁親王は桂離宮を造営し、自身も西鴨茂に別邸となる離宮を構えました。そこで多くの文化人らと交流を持ち、茶の湯や歌、絵画や花、狂言など、あらゆる美的な活動に勤しまれました。寛永宮廷サロンと呼ばれるその活動の舞台となったのが、旧一条恵観山荘であったのです。

時代を経て、昭和34年、鎌倉の地に移され、その後、昭和39年に国の重要文化財に指定され、昭和62年に、現在の地へ再び移され、往年の庭の姿も復元されました。

一般財団法人 茶道宗徧流不審庵が、旧一条恵観山荘保存会を運営しています。ここで拝観会や様々な催しを通じ広い認知と、この山荘の保存・活用・管理・公開する事業とともに、日本伝統文化の普及、啓蒙及び向上を支援し、発展に寄与することを目的にしています。

その企画の一つの「第2回　体験型美術館～千利休と四世利休流山田宗徧の茶道具比較展～」に、昨年の6月20日に伺いました。通常ガラスケースの中に展示してある利休の茶杓などを、解説を交えながら手に取って見せて頂き、茶の湯の歴史に触れられ、只々感動した次第でした。

次に訪れたのが、昨年の11月28日に行われた「第2回恵観山荘にお招きする茶事～千利休を追想～」です。前回の体験型美術館で展示された道具を実際に使用する茶事で、懐石後の濃茶席にて、長次郎作黒楽銘「寒天」で、濃茶を頂くことができ、更に、お点前をされた方が、利休の茶杓はとても使い易く、また、長次郎の茶碗は茶筅が回し易かったとおっしゃられ、美しさだけでなく機能も最上級なのだと伺い知ることができました。

昨今、情報が多く頭の中だけで理解しがちですが、この体験を通じて、昔から言われている、本物を見る事、そして、体感する事が本当に重要な事だと思います。